

2020年5月22日

「傷ついた旅人」として——「隣人愛」を考える（4）：

新島先生の受けた隣人愛（1）

副校長 竹山 幸男

5月も半ばとなりました。春が過ぎ去り、季節は初夏に向かって進んでいます。晴れた日の太陽の日差しもだんだん強くなってきて、先日、京都では気温が30度近くまで上がりました。また、晴れた日の月明かりもとても明るく感じられ、京都タワーのライトアップとあわせて、くっきりと映っています。今週は時折、雨の日もあり、これから少しずつ梅雨の季節に近づいていく様子です。皆さんのお住まいの地域で、日々どんな風景を見ておられるでしょうか。



「学習ポータルサイト」を用いた学びも4月から始めてちょうど2か月目に入りました。

感染症のこれからの状況については、まだまだ予測が難しい状況が続きますので、学校としては、生徒の皆さんのいのちと健康を守ることを最優先に考えながら、「学習ポータルサイト」を用いた新たな学びを基本に据えて、各教科の学びの内容、生徒の皆さんとのやり取りの内容もさらに充実させていきたいと考えています。この1か月間も、まず、担任の先生と生徒の皆さんとのつながりを大切にすることと、新たな学びの形態に慣れていただくことを主眼にして、少しずつ取り組みの内容をステップアップしてきました。教科の学びの面でも、通常学校で行なわれている授業とは違うスタイルで、生徒の皆さん自身の学びをふまえて課題を提出していただき、それにレスポンスする双方向の学びを行うところから、zoomで教科担当の先生方との面談などを行いながら、さらに双方向のやり取りを深めていくというかたちを模索してきました。オンライン授業を取り込んだ教育の先進国である海外の進んだ学校の事例なども学びながら、学びの伴走者としての教員像などこれまでの「授業観」からの転換を探究していくような時代にもなってきています。今後の感染状況の推移にもよりますが、6月第1週には学年を分散させた登校日を設定し、生徒の皆さんとのつながり（心のケア）と学習支援ができるような場を持つことを検討しています。

まだ1か月が経過したところですので、皆さんの中で、教科の内容、学校のことなどでわからないことやご質問がある場合には、教科・担任の先生へ、また、機器の操作のことでわからないことがある場合は、ICT機器利用のヘルプデスクまでご遠慮なくご連絡ください。

学校の教育相談も随時受け付けていますので、校務センターまでご連絡くだされば、担当者から連絡させていただきますのでよろしくお願いいたします。

第7週目（5月25日～）は、第6週目に引き続き、これまでの動画を用いた課題の提示、提出、メールでの質問、教科によってはzoomで皆さんからの質問を受け付ける時間を設けますので、生徒の皆さんも参加してみてください。あわせて、各学年の国語、数学、英語、社会、理科の先生方と生徒の皆さんとの面談（クラスまたはグループなどで）を行っています。各教科の担当の先生からによる予定の連絡をしっかりと見ていただいて、その指定された時間帯に面談に参加してください。（生徒の皆さんの参加確認も取りますので、皆さん参加してください。）

先週より、1年生の皆さんに対しては、夏休みの自由研究の取り組みに向けた動画を見ていただき、夏休みの取り組みに向けての事前の準備を少しずつ始めています。1年生の皆さんは、学習ポータルサイトの「自由研究」コーナーから動画を見ていただき、明日23日の（土）までにロイロノートを用いて副校長あてレスポンス（提出）をよろしくお願いいたします。来週25日（月）からのグループ面談の日程と時間については、ロイロノートで連絡済みですので、その時間帯にzoomでの面談に参加してくださいますようお願いいたします。

また、日頃の担任の先生からの連絡、面談については、その都度、レスポンス（応答）していただき、皆さんの日頃の様子などを知らせてください。健康観察については、引き続き保健室の教員（阪田）あてご提出ください。特に、6月の第1週目に登校日を設定することを検討していますので、よろしくお願いいたします。第7週目の詳細については、別途ホームページ上の教務部より「第7週目のお知らせ」または学習ポータルサイト上の生徒ページ・生徒伝達に「第7週目のお知らせ」をご覧ください。機器（iPad）やアプリの使い方不明な点があれば、「学習ポータルサイト」（→ [生徒ページ] → [在宅学習サポート]）にアドバイスや解決方法を掲載しています。また、「2020年度版ICT活用・情報倫理ハンドブック」（同志社中学校）の1～28ページに、課題提出で用いているロイロノート、zoomの利用方法を含め、iPadでの学習に際してのさまざまな活用ガイドが掲載されていますので、取り組みの際には、引き続き参照するようにしてください。

\*\*\*\*\*

先週は、「母の日」から見えるものと題して、「母の日」について皆さんと考えてみました。「母の日」に広く贈られている赤いカーネーション。その花言葉は「熱烈な愛」。現在、世界中に広がっているこの「母の日」の由来にも、神様からの「熱烈な愛」を受け、イエス・キリストの愛に満たされて生きたクリスチャンの母の姿、そして、その母を愛する一人のクリスチャン女性の姿があることを知りました。そして、この「母の日」にも、“GOOD SAMARITAN”のスピリット、つまり、アン・ジャービズさんの取り組みの中に見られた、心から心配し寄り添う思いや見返りを求めない親切な行動、無償の愛—「熱烈な愛」による具体的な行動を通じて、「真の隣人

愛」を私たちに教えようとされていることを学びました。

さて、今週から何回かにわたっては、同志社の創立者・新島先生が経験した「隣人愛」について考えていきたいと思えます。実は、新島先生の生涯をふりかえってみると、新島先生自身が“GOOD SAMARITAN”のスピリット（「隣人愛」の実践と「受けるより与える方が幸いである」という聖書の御言葉を具体的に行動されたこと）に生きておられたことを、さまざまな場面で見ることができます。では、新島先生のこのスピリットは、どのような経験から育まれてものなのかを見てみましょう。

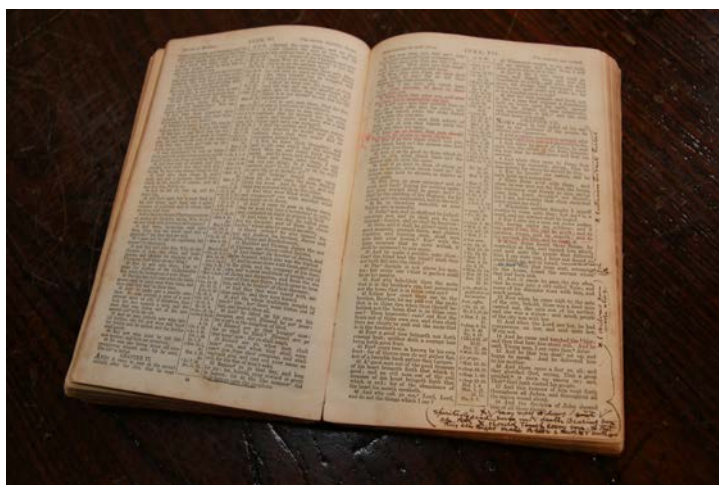
1865年7月。函館を脱国して約1年。アメリカのボストン港に無事たどり着いた新島先生は、喜びと感激にあふれていました。新島先生のこの喜びと感激もほんの束の間。テイラー船長は、『家族へ会いに出かける。あなたのことは船主に話しておきます。』と言ったきり出ていってすぐには戻って来ず、結局、たった一人でワイルド・ローバー号の船内で待たされることとなります。新島先生は、日本から脱国、密航をしてきたので、知り合いがいるはずはなく、迎えに来てくれる人も誰もいません。まして、日本語も通じない異国の地で、生活するお金も持っていません。当時のアメリカは南北戦争が終わった直後で、とても混乱していた時代でした。『こんなときにアメリカに来て、誰も面倒を見てくれる人なんかいないよ。』という船員もいました。船長がいなくなった船内では、船員が新島先生に掃除やいろいろな仕事をさせて、毎日体の節々が痛くなったり、『これからいったいどうなるのだろう』『いつまでこんな状態が続くのだろう』

というとても不安で心配な気持ちでいっぱいになりながら、精神的にもかなり落ち込んだりイライラしたりして、船内で毎日を過ごしていました。船から出てボストン市内を少し歩いて古本屋に行き、テイラー船長からもらったお小遣いで、英文の「ロビンソン・クルーソー漂流記（The Life and Strange Surprising Adventures of Robinson Crusoe, of York, Mariner）」を買うことができました。「ロビンソン・クルーソー漂流記」では、無人島の中でひとりぼっちになった主人公は、寂しさに耐え切れず、神様に祈るようになります。はじめのうちは、『神様はどうしてこんな悲惨な目に自分をあわせる

のですか』と祈っていましたが、そのうちに『主よ、私を助けてください。激しい苦しみに悩んでいる私を助けてください。』と祈るようになります。新島先生は、この「ロビンソン・クルーソー漂流記」を読んで、「苦難の中、まず祈ることの大切さ」を学んだとふりかえっておられます。そして、ロビンソン・クルーソーと同じように、新島先生もまた、先の見えない不安と心配の中、毎晩『私をどうかみじめな状態の中へ投げ捨てないでください、どうか私の大きな志を成し遂げさせてください』と神様にお祈りを続けられていました。



それから何と2か月以上、80日（10週間）その状態が続きました。もうだめかもしれないとの思いも頭をよぎってきました。しかし、神様の時は突然やってきました。10月11日、ワイルドローバー号の船主であり、当時ボストンの実業界で著名なハーディー商会の会長であるハーディーが、新島先生のところにやって来ました。ハーディーは、新島先生に語りかけましたが、残念ながら新島先生の英語は十分に通じませんでした。そこで、ハーディーは新島先生をボストン港の近くにあったセイラーズ・ホーム（船員会館）に宿泊させます。そこで、新島先生は、全身全霊をこめて、2日間寝ずに「なぜ脱国してきたのか」という英文の手記を記します。自分が生まれた江戸屋敷のできごと、蘭学を学んだこと、西洋文明へのあこがれ、キリスト教を学びたい思いなどを、英作文には自信はなかったようですが、がんばって英語で書かれました。この英文の手記を読んだハーディー夫人がまず感激し、その後、ハーディーがそれを読んでとても心を動かされ、新島先生を養子として引き取る決心をしました。ハーディーには、すでに4人の子どもがいて、養子も1人〔ハーディーさんの亡くなられた恩人の子どもシアーズさん〕引き受けていました。過去には、新島先生のようなアジアからの見知らぬ貧しい青年を引き取りサポートしたのですが、うまくいかなかった経験があるので、ためらいもあったと言われています。しかし、新島先生の特にいのちがけで脱国、密航してまで、キリスト教を知りたい、神様を知りたいという熱い思いと志が、クリスチャンの大実業家であったハーディー夫妻の心を動かし、新島先生を養子として引き取ることになります。そして、全く面識のない、アジアの日本から脱国、密航してきた青年のために、当時としては最高の教育を施すために、学校側と話しをしてホームステイ先を探し、教育費、生活費もすべてを与えていくという当時としては考えられない、あり得ないことが起こったのです。全寮制



写真：新島先生の愛用の英文聖書。ハーディーさんのもう一人の養子シアーズさんからもらったもので、新島遺品庫にあります。2019年度の同志社中学校誕生日カードの写真にも用いました。新島先生による英語のメモが至る所にあります。

の学校なので、寮滞在が原則なのですが、新島先生の特別な状況を考慮してホームステイ先を探したのも、ハーディーの配慮が行き届いていたものと思われま。ちなみに、新島先生が通ったボストン近郊の高校フィリップスアカデミーは、当時も今もアメリカの名門高校の中でも特に有名なボーディングスクールで、卒業生にはアメリカの政治・経済・その他さまざまな分野で活躍している方々がおられる学校です。ハーディー夫妻からの

\* 「アメリカのスーパーエリート教育（著：石角完爾 ジャパンタイムズ出版）」という本を読むと、ボーディングスクールの歴史、現在の教育の様子がわかりやすく書かれていますので、お読みください。

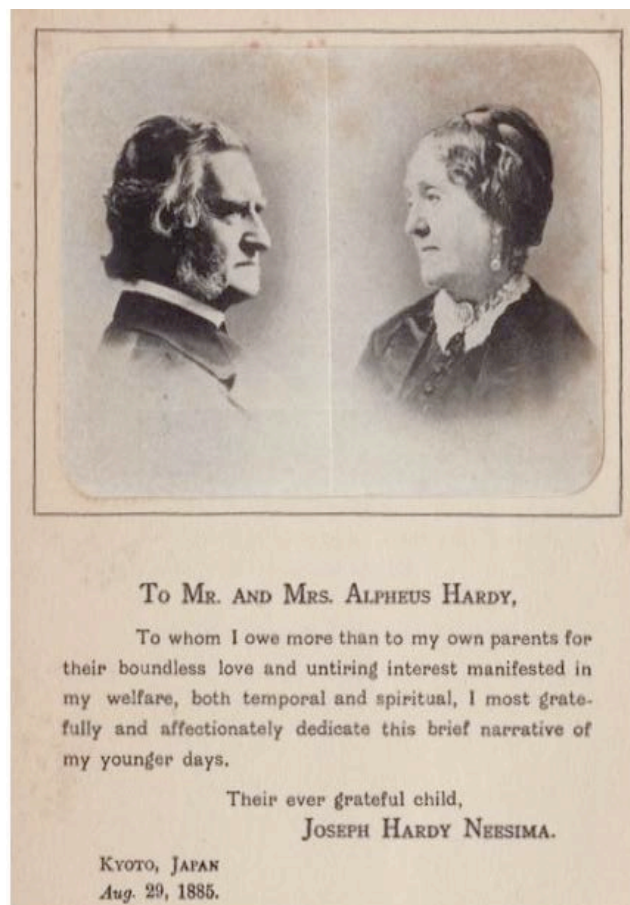
改訂版 **アメリカのスーパーエリート教育**  
A Study of Boarding Schools and Elite Education in the United States  
「独創」力とリーダーシップを育てる全寮制学校  
石角完爾  
Kanji Ishikami  
理想の教育がある  
思考力、独創力、リーダーシップを育む  
ボーディングスクール留学のすすめ。 The Japan Times



返事があった時、新島先生の目は嬉しさのあまり涙があふれ感謝の思いにいっぱいになった、と語っておられます。

この新島先生のお話は、皆さんもよく聞いたことがあると思います。先日来学んできた新約聖書の「よきサマリア人」のたとえ話から、新島先生とハーディー夫妻との出会いを考えてみると、傷ついて倒れている旅人は誰で、よきサマリア人は誰になるのでしょうか。

新島先生は、当時のアメリカでは「外国人」そして、アジア人にあたります。ヨーロッパから来ている人たちが国づくりを進めていたアメリカの市民から見れば、サマリア人のような異邦人にあたりません。新島先生もハーディー夫妻に対して、あのサマリア人のようにみじめな境遇から救い出してくださった恩人として、生涯感謝しても感謝しきれない思いを持っていたと言われていています。ですので、先ほどの問いかけに対しては、善きサマリア人がハーディー夫妻、傷ついた旅人こそが新島先生だったと言えるでしょう。そして、あり得ないほどの愛情をもって「隣人愛」を実践したハーディー夫妻、その「隣人愛」を注がれた新島先生がおられたからこそ新島先生のその後の歩みと同志社の創立がある、ともいえるのです。そして、ハーディー夫妻に見られる「隣人愛」示された愛とその行動は、神様の愛を受けたクリスチャンとしての犠牲を伴う無償の愛、無条件の愛に基づく行動であったとも考えられます。



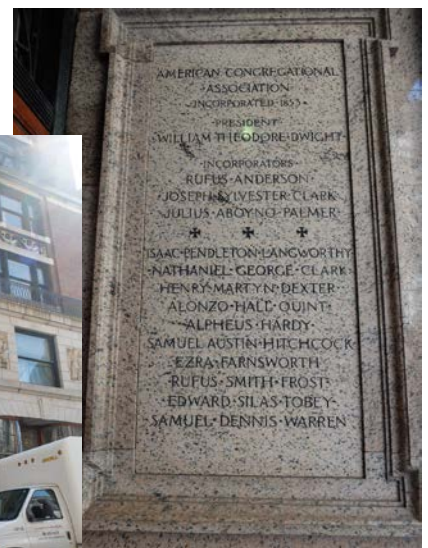
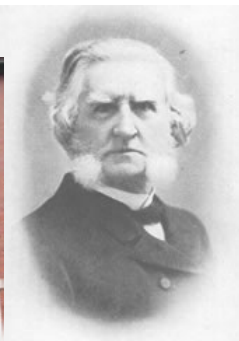
現代の私たちは、新約聖書の「善きサマリア人」のたとえ話も、新島先生の生涯、特にハーディー夫妻と新島先生の運命的な出会いも、すべてのストーリーを知った上で安心して読み、学ぶことができます。しかし、「歴史にif(もしも)があったなら」とよく言われるように、たとえ話で「もし善きサマリア人が現れなかったら」そして「もしハーディー夫妻が現れず新島先生を養子にしなかったら」いったいどうなっていたのでしょうか。多分、傷ついた旅人も、新島先生も、旅の途中で、また、アメリカに上陸したものの路頭に迷っていのちを落としていたかもしれません。そうであったなら、その後の新島先生の歩みもなければ、同志社の創立もありません。ということは、私たちが同志社中学校で教職員として、また、生徒として共に学んでいくということもありませんでした。今年の入学式のお話の中で引用した聖書の御言葉の1つに、「あなた方が私を選んだのではありません。私があなた方を選んだのです。」という言葉があります。皆

さんもこの同志社中学校に入学するに際して、いろいろな努力、さまざまな経過があったことと思います。しかし、人間の思いをはるかに超えた神様の愛による導き、摂理（PROVIDENCE）があったからこそ、私たちがこの場に集えているということを決して忘れてはいけないと思います。

その意味で言えば、私たち一人ひとりも神様の前に弱さを持った存在であり、新島先生がよく言われた聖書の言葉を借りるとすれば、「取るに足りないもの」を愛して導いてくださる神様の思い、自分の力だけでそれほど何かができるわけでもないけれども、「隣人愛」に育まれながら日々の生活を歩ませてくださっていることに気づくことが大切です。つまり、私たち一人ひとりも「傷ついた旅人」であることに気づくこと、いつもは意識していない神様からの一方的な愛に気づかされ、日々の祈りの中で神さまへの感謝、神様からの力、恵、平安が与えられることが生きるために必要となるのです。

コロナ感染症の感染状況により、学校が休校になり1か月。いつもはあっという間に過ぎ去る新学期ですが、とても長い1か月間でした。この先どうなるのか予測が難しい状況が続き、いろいろと不安や心配が出てくることもあるかと思えます。このお話をまとめながら、新島先生のボストン港での3か月間のことを比較して考えてみると、新島先生の先の見えない3か月は相当長かっただろうと想像してしまいます。全く先がわからない中を、とても孤独な状態で、日々神様に祈られていた姿。そのことを思う時に、学校としても、私たち一人ひとりとしても、今まさにボストン港の新島先生と同じような環境の中で、まだ1か月間ですが、神様からのレッスンを受けているように感じています。そのレッスンの中に、私たち一人ひとりがこれまでの人生、生活の中で「隣人愛」をすでに受けて今ここに存在していること、また、そのことを思い起こし神様に感謝しつつ、神様の愛を心を受けて、イエス・キリストの愛で心を満たしながら、それぞれ遣わされた場所（ご家庭、職場など）において、具体的な行為として「隣人愛」を実践していける1週間となるようにともに祈って歩んでいきましょう。

ボストンに現存するハーディーさんの自宅前で記念撮影する同中生たち（2014）



ボストンにある AMERICAN CONGREGATIONAL ASSOCIATION の建物の石板には、ハーディーさんのお名前があり、館内には胸像も含めて展示があります。国際交流プログラムの「BOSTON ハーバード・MIT 研修」でも、同中生が訪問しています。